

連載

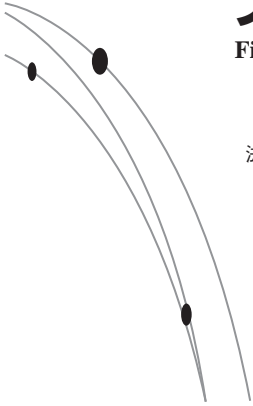
フィールド・アイ

Field Eye

ジュネーヴから——①

法政大学教授 奥西 好夫

Yoshio Okunishi



ジュネーヴのアパート探し

昨年9月からスイスのジュネーヴに滞在している。旅行はともかく、住むとなるとなかなか大変だというのが正直な感想だ。嫌な予感は渡航前からあった。ヴィザ取得のため東京のスイス大使館に電話したところ、大使館ではヴィザ業務は一切行っていない、入管制度は州によって異なるので各州政府のホームページを参照して直接手続きせよとのことだった。すべてフランス語で書かれたジュネーヴ州政府のホームページを読み、何とか必要書類を送り、1カ月半くらいで“l’assurance d’autorisation de séjour”と題する書面を受け取った。しかし、これは滞在許可証の発行を約束するもので、許可証自体ではない（ことをあとで知った）。

スイス入国後、滞在許可証を得るには、まず自宅住所を確定する必要がある。また、日本から送った荷物を受け取るためにも住所の確定が必要である（実際、通関手続きに際してアパートの賃貸契約書のコピーの提出を求められた）。そもそも、いつまでもホテル暮らしを続けるわけにもいかないので、到着翌日から早速アパート探しに取りかかった。

ジュネーヴのアパート探しが、特にここ数年、大変であるとの噂は聞いていた。しかし、実態は噂以上だった。とにかく賃貸物件の数自体きわめて少ないのである。例えば、代表的な不動産のインターネット・サイト（www.homegate.ch）で、ジュネーヴ+家具付きアパート+月26万円以下、などの条件で検索すると、該当物件なし、と出たのには驚いた。レジダンスと呼ばれる家具付きワンルームマンションも当たって見たが、10月中旬まで空き室なし、との返事だった（今のアパートと契約する当日になって、月16万円の良

い部屋が空いたと連絡があったが、時すでに遅しである）。

職場（ILO）の掲示板には30件ほどの物件が掲示されていたが、条件面で適合するものはごくわずかだった。その中で、家具付き、パキ地区（東京で言うと上野のようなイメージか）、月20万円の物件が目にとまったので連絡して下見に行った。応募者が入れ替わり立ち替わり10人以上は訪れており、競争率が高そうだった。家具付きとは言うものの寂しい感じの部屋で、家主（ILO関係者ではない）がこちら側の情報はいろいろ収集するくせに、自分の名刺も渡さないのが気になった。

翌日、別のアパートを見に行っただ。これは上記のインターネット・サイトで見つけたもので、月30万円という家賃は高すぎると思ったが、その他の条件は特に不満なかった。築100年近い古い建物でエレベーターはないが、部屋はモダンに改装されており、家具類も充実しており不便はなさそうだった（広さは65m²）。家主はイタリア系のコンサルタントだったが、英語で意思疎通でき、賃貸申込書を提出することにした。

しかし、このあとがまた容易でない。正式に借りるためには9月分の家賃と3カ月分の家賃相当の保証金、計120万円（！）が必要なのである。日本の銀行から送金するには、こちらで銀行口座を開設するとともに、日本の銀行に海外送金登録申込書を送らなければならない。そのいずれにも、スイスでの現住所が必要である。これでは先に進みようがない。両者とも、職場の住所で済ませてもらうしかない。銀行口座の開設も決して簡単というわけではなかったが、インターネットに飛び交っている怪しげな情報（『ゴルゴ13』に出てくる秘密口座の存在、口座開設には最低1000万円以上必要など）は少なくとも一般の銀行に関しては無縁だった。ただ、日本からの送金は間に合いそうもなかったので、毎日ATMから日本の銀行のカードで少しずつ現金を引き出して対応した。

あれやこれやで実際にアパートに入居したのは、ジュネーヴ到着の10日後である。これでも研究所の同僚からは「新記録だ」と言われた。何カ月もアパートに入居できない例は珍しくないという。みんな、一体どうしているのか。知り合いの家に居候する（「インフォーマル雇用」型）、短期の賃貸を繰り返す（「臨時雇用」型）が比較的多いようだ。企業派遣の場合は、あらかじめ企業が賃貸物件の確保、契約を済ませている例が

多いようだ（これは「内部市場」型か）。現に私のアパートも以前の借り主はスイス IBM だった。個人間で賃貸契約を引き継ぐケースもある。私の場合も、アメリカに帰国するというある ILO 職員（私自身は面識がない）から、渡航前にそうした話があり、多少は当てにしていたのだが、なかなか連絡がなく、結局他の人が既に借りてしまったとのことだった。この場合、家主でもない彼にとってどういうインセンティブがあるのか不思議だったが、家具なしアパート（この方が圧倒的に多い）の場合、つぎの入居者に家具をまとめて売りやすいというメリットがあるようだ。

アパート探し以外では、物価が高いのにも驚いた。ジュネーヴに到着したのは夜の 8 時過ぎだったが、ホテルにレストランはなく、近所のスーパーも閉まっていた（スーパーは、曜日によるが夕方の 7 時から 7 時半には閉まる）。しかたなくマクドナルドに入ったが、チキンバーガーが 1 つ 610 円した。人件費比率が高いサービス業で特にこうした傾向が強く、ワイシャツ 1 枚のクリーニング代は 700 円以上する。日本と比べて安いのは国産のビールくらいだ（日本の約半額）。ちなみに消費税はヨーロッパの中では低く、7.6%（酒類以外の食料品は 2.4%）である。

こうした高物価は高賃金と相関している。ジュネーヴ州の賃金統計（2006 年）によると、全民間労働者の中位賃金（週 40 時間労働に換算）は月額 63 万 5000 円、第 1 十分位は 39 万 7600 円、第 9 十分位は 130 万円である（ジュネーヴの統計数値は、すべて州政府ホームページ www.ge.ch から）。日本の 2006 年の中位賃金（所定内給与）は月額 26 万 4600 円、第 1 十分位は 15 万 8100 円、第 9 十分位は 49 万 1300 円であることを考えると（『賃金構造基本統計調査』）、仮に所定外給与、ボーナスを加えても、また多少の為替変動があったとしても、ジュネーヴの高賃金は動かし難い。

高賃金をもたらす一つの帰結は、市場で提供される「サービスの消失」だ。ある同僚は IKEA で家具を買ったら配達に 1 カ月かかると言われたそうだ。私も近所の家電チェーン店でプリンターを買ったとき、配達は元々期待していなかったが、箱に紐もかけてくれないのには驚いた。こうしたサービス供給の希少さと高価格は計算上「高生産性」をもたらすのだろうが、それを日本も見習うべきかどうか考え込んでしまう点だ。

一方、ジュネーヴ州の失業率は 2008 年 12 月現在 5.9% とスイス全体（3.0%）より高いものの、文化・経済圏がつながっているフランスより低いのは、高賃金国としては立派である（失業率は 2005 年以降、低下傾向にあったが、2008 年央から上昇に転じている）。伝統の金融業以外に、数多い国際機関の存在が需要の創出に大きく貢献しているのではないかと思う。しかし、だからと言ってジュネーヴ政府やジュネーヴ人が、人口の 4 割を占める外国人に対して、特に優しいとか、英語を使って迎合しようなどということとはほとんどない。このあたりも立派と言うべきか。かつて森有正が、ILO の通訳の仕事で一時滞在したジュネーヴについて、「ここでは何もかも清潔で、すみ切って、冷たい。山も、湖水も、町も、おそらく人の心もまた」（『パピロンの流れのほとりにて』1954 年 2 月 16 日）と書いていたのを思い出すのはそんな時だ。

*2008 年 9 月時点の為替レートはほぼ 1 スイス・フラン = 100 円だったので、本稿ではすべてこのレートで換算している。なお、本稿執筆の 12 月下旬には、1 スイス・フラン = 80 円近くまで円高・フラン安が進んでいる。

おくにし・よしお 法政大学経営学部教授。2008 年 9 月より、スイス、ジュネーヴの ILO 国際労働研究所 (IILS) に訪問研究員として滞在。最近の論文に「正社員および非正社員の賃金と仕事に関する意識」『日本労働研究雑誌』No. 576。労働経済学専攻。